



SAITAMA 精神保健福祉だより

彩の国
埼玉県
埼玉県マスコット
コバトン & さいたまっちゃん



埼玉県立精神保健福祉センター 〒362-0806 埼玉県北足立郡伊奈町小室818番地2
TEL 048-723-3333(代表) FAX 048-723-1561
ホームページ <https://www.pref.saitama.lg.jp/b0606/tayori/index.html>

CONTENTS

埼玉県内の精神障害者スポーツの歩み

- 1 障害者スポーツとは — 精神障害者スポーツの歩みとこれから — 1
福井県立大学看護福祉学部教授 岡田隆志
- 2 埼玉県内の精神障害者スポーツについて..... 3
公益社団法人 埼玉県精神保健福祉協会
- 3 各関係機関、支援者からの活動レポート 4
(1) 埼玉県障害者スポーツ協会について
一般社団法人 埼玉県障害者スポーツ協会
(2) 全国障害者スポーツ大会 埼玉県代表選手団に帯同して
埼玉県立精神保健福祉センター 田中花香理
(3) 埼玉ソーシャルフットボール協会について
埼玉ソーシャルフットボール協会 副会長 前原佑紀
埼玉ソーシャルフットボール協会 運営委員 野村忠明
(4) コートで輝いた、それぞれの一步 — 全国大会準優勝への軌跡 —
バレーボール競技(精神障害の部) 埼玉県選抜代表チーム監督 河本次生

No.112

令和8年9月

※当機関誌は、埼玉県立精神保健福祉センターのホームページから、
全文ダウンロードできます。是非、ご覧ください。
<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0606/tayori/index.html>



埼玉県内の精神障害者スポーツの歩み

第24回全国障害者スポーツ大会「わたSHIGA輝く障スポ2025」において、バレーボール競技(精神障害の部)埼玉県選抜代表チームが準優勝を飾りました。この功績は、障害種別を問わず多くの障害者の励みになり、県民の関心も集めました。

埼玉県では、昭和の時代から今日に至るまで、精神障害者スポーツの活動が脈々と受け継がれ、県内各地域へと発展しています。

本稿では、日本における障害者スポーツ及び県内における精神障害者スポーツの歩み、県内の障害者スポーツの現況、実際に大会へ出場し活躍する選手や支援者の声をお届けします。

1 障害者スポーツとは —精神障害者スポーツの歩みとこれから—

はじめに

私は、今から20年以上前、全国障害者スポーツ大会のオープン競技であった精神障害者バレーボールに、埼玉県選抜代表チームのスタッフとして参加した経験があります。大会終了後、ある選手が「精神障害になって人生は大きく変わってしまった。それでも頑張ってきて、こうやって全国大会のメンバーに選ばれた。精神障害をもったことで新たに得られるものもあるのですね。」と話してくれました。その言葉を聞いたとき、障害者スポーツはリハビリテーションの域を超え、人の生き方や人生そのものに影響を与える力があることを実感しました。

福井県立大学看護福祉学部教授 岡田隆志

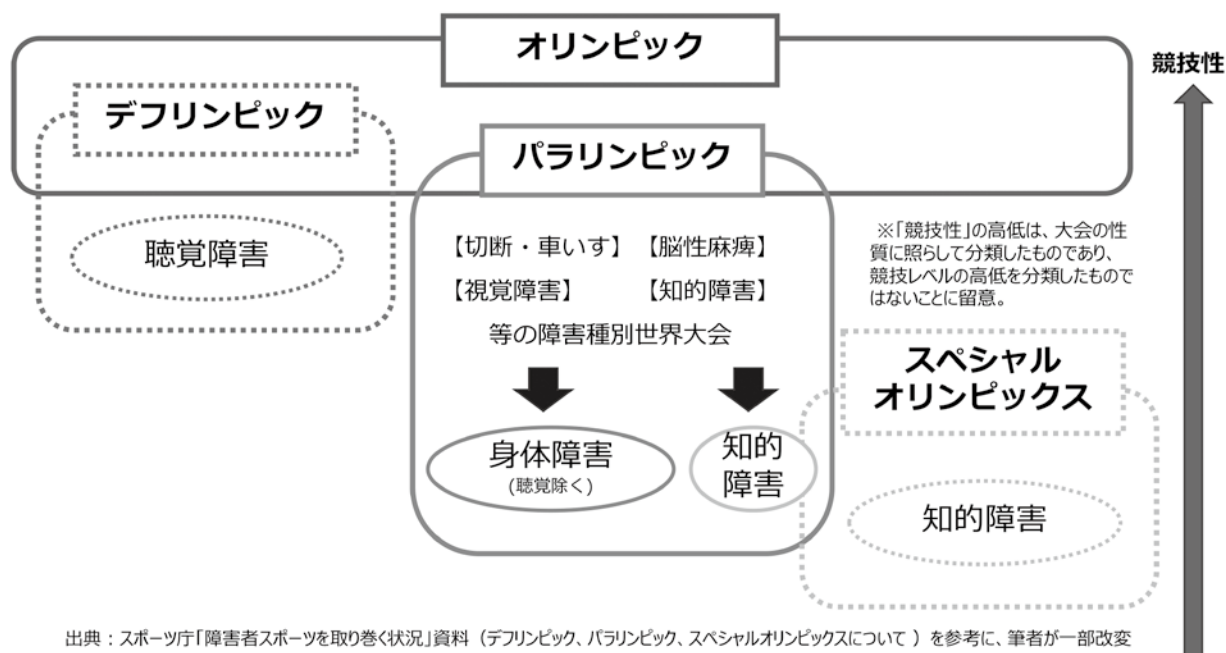
障害者スポーツには障害種別に応じた国際大会が存在し、日本からも多くの選手が出場し活躍しています。しかしながら、IOC(国際オリンピック委員会)が公認する障害者スポーツの総合国際競技大会の中に、精神障害者を対象とする大会はいまだ位置づけられていません。

【日本における障害者スポーツの歩み】

日本の障害者スポーツの歩みを振り返ってみると、その発展には三つの大きな転換点がありました。

まず、昭和39年の東京パラリンピックです。当時は障害者の社会参加よりも保護や更生が重視されていた時代でした。そのなかで東京大会は、障害の

図1 障害者スポーツの総合国際競技大会の関係



ある人においてもスポーツが人生を豊かにし、社会参加を支えるものであることを広く国民に示しました。翌年には全国身体障害者スポーツ大会が開催され、障害者スポーツ普及のきっかけとなりました。

次に、平成10年の長野パラリンピック冬季競技大会です。この大会を通じて「パラリンピック」という言葉が広く認知され、それまでリハビリテーションの延長として捉えられていた障害者スポーツが競技スポーツとしても注目を集めるようになりました。全国障害者スポーツ大会では身体障害者と知的障害者の大会が統合され、精神障害者にも参加の道が徐々に開かれるようになりました。さらに、障害者権利条約において、障害のある人もスポーツを楽しむことが当然の権利として位置づけられました。こうした流れの中で、スポーツ基本法の制定やスポーツ庁の設置が進み、障害者スポーツはスポーツ政策の重要な柱の一つとなりました。

そして、令和3年に開催された東京2020パラリンピック競技大会です。競技としての魅力に加え、多様性を認め合い支え合う共生社会の実現が大きなテーマとして掲げられました。「パラスポーツ」という言葉も広まり、スポーツ基本法の改正とともに、スポーツを通じたウェルビーイングの向上や地域づくりが目指されるようになっていきます。

【精神障害者スポーツの発展】

日本の精神障害者スポーツの普及を象徴する種目がバレーボールです。平成10年に日本精神保健福祉連盟内に障害者スポーツ推進委員会が設置され

ると、平成13年に初めて全国大会が開催されました。その後、全国障害者スポーツ大会のオープン競技を経て、平成20年大会から正式競技となりました。地域単位でみると、例えば埼玉県では複数の保健所が事業として交流大会を持ち回りで開催し、医療機関や作業所、ボランティア等と協働しながら大会を運営するなど、行政による後押しを受けながら地域に広がっていきました。今では、埼玉県障害者バレーボール協会に精神障害部門が設置され、継続的な活動が行われています。また、全国障害者スポーツ大会では各ブロックを勝ち抜いたチームが日本一を競っています。

平成19年頃から大阪府を中心に始まったソーシャルフットボールも、代表的な精神障害者スポーツとなっています。埼玉県では浦和レッズをはじめとする地域のサッカー・フットサル関係者との連携を通じて、交流大会やリーグ戦が催されています。全国では約160のチームが活動し、全国規模の選手権大会も開催されています。

さらに近年では、バスケットボールも活発で、日本の精神障害者スポーツは、医療や福祉関係者だけでなく、多様な人々や団体に支えられながら発展を続けています。

【障害者スポーツがもたらす力とこれからの課題】

障害者スポーツには、体力や身体機能の向上、ストレスの軽減だけでなく、仲間との出会いや交流を通じて自らの可能性を再発見し、主体的な生活につながる効果があります。さらに支援者にとっても、

当事者の力や可能性をあらためて実感し、自らの価値観や支援のあり方を見つめ直しながら、専門職としての実践を振り返るなど、専門性を高める機会にもなり得ます。

このような多くの意義をもつ障害者スポーツですが、活動環境は決して十分とはいえません。少しずつ地域に拡がりをみせていたなか、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、多くの大会や活動が中止・縮小を余儀なくされました。そして、その影響が薄れつつある現在においても、活動機会は十分に回復していません。その背景には、活動の多くが当事者や支援者の熱意によって支えられている現状があり、個人の自主性によって成り立つ体制では、活動をより多くの地域に広げ、継続していくことが難しい面もあります。

本来、障害者スポーツとは、ルールや道具を工夫することで、日常生活において障害となるものをコート上では「非障害化」させ、公平な競技を実現するスポーツを意味しています。近年は、知的障害のある選手と障害のないパートナーがともに行うユニファイドスポーツをはじめ、障害の有無を超えて楽しむ競技も始められています。障害者スポーツが「参加する側」と「支援する側」に分かれるのではなく、「ともに楽しむスポーツ」として当たり前になっていくことが、これからの発展につながるのではないかと私は考えています。

【参考文献】

- ・スポーツ庁ホームページ「バラスポーツ」
(<https://www.mext.go.jp/sports/index.htm>)
- ・日本精神保健福祉連盟ホームページ「スポーツと精神障害」
(<https://www.frenmei.or.jp/>)
- ・日本ソーシャルフットボール協会ホームページ
(<https://jsfa-official.jp/>)

埼玉県精神保健福祉協会
二次元コード



2 埼玉県内の精神障害者スポーツについて

当協会は、昭和40年5月1日の設立以来、心の健康づくりをはじめとする精神保健に関する活動を推進してまいりました。中でも、スポーツを通じた取組を、当協会の事業の柱の一つとして位置づけています。

これまで精神障害者スポーツ推進の一翼を担ってきた立場から、埼玉県内（以下、「県内」）における精神障害者スポーツについて、当協会の活動を交えながらご紹介いたします。

県内の精神障害者スポーツの歴史は古く、精神病院卓球大会（現：埼玉県精神保健福祉卓球大会）は、昭和43年に第1回大会が開催され、今年度には第52回大会の開催が予定されています。また、昭和45年には埼玉県精神病院対抗ソフトボール大会（のちの埼玉県精神保健福祉ソフトボール大会）も第1回大会が開催されるなど、昭和の時代から脈々と活動が受け継がれています。

平成16年に全国障害者スポーツ大会（以下、「全国大会」）が埼玉県で開催されたことを契機として、同年12月に埼玉県障害者スポーツ協会が設立されました。以降、障害の種別を問わず、障害者スポーツ活動は着実に展開され、精神科デイケアや障害者支援施設においては、精神障害者ソフトバレーボールやフットサルなどの活動が広がり、今日まで活動が続いています。

さて、精神障害者スポーツは、リハビリテーショ

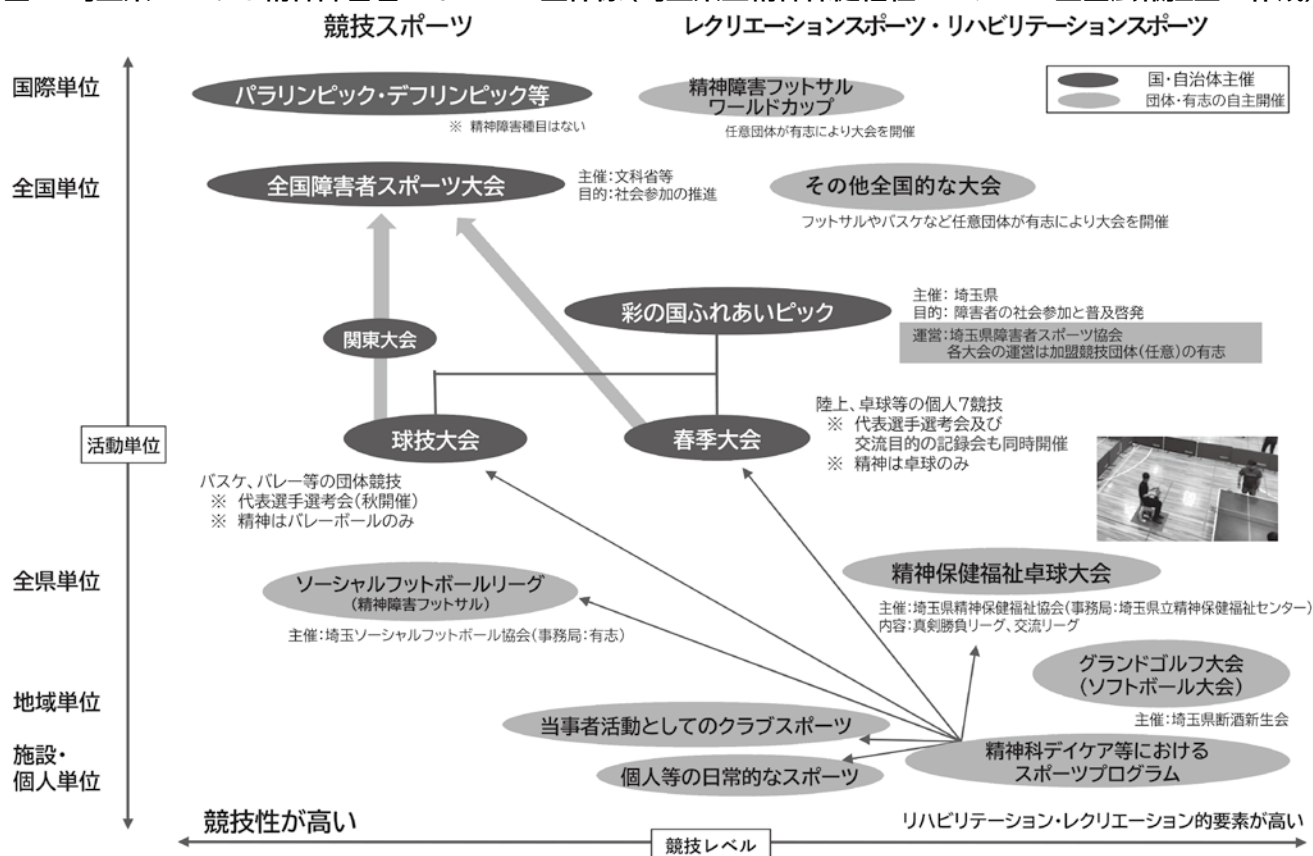
公益社団法人 埼玉県精神保健福祉協会

ン・レクリエーションスポーツから競技スポーツまで幅広い役割があり、県内で広く展開されている精神障害者スポーツの活動について、その役割という視点から整理してみます。

リハビリテーション・レクリエーションスポーツでは、心身の機能回復やリフレッシュ、社会参加の促進が重視されており、個人参加型の交流イベントや地域での活動、また精神科デイケア等のプログラムとして実施されています。例えば、（公社）埼玉県断酒新生会によるソフトボール大会（現在は主にグランドゴルフ大会が実施されている）や、当協会主催の埼玉県精神保健福祉卓球大会などがこれに該当し、特に埼玉県精神保健福祉卓球大会は、県内の精神科デイケア等で結成されたチームが、リーグ戦形式で順位を競いつつ親善を深める活気ある大会となっています。昨年度は13団体が参加し、県内全域を対象とした広域的なスポーツ活動として定着しています。

一方、競技スポーツは、障害種別・競技種目ごとの競技力の高さを追求する障害者スポーツとして位置付けられ、障害別のルールや参加基準を明確にし、勝敗をつけることが重視されます。県内では、「彩の国ふれあいピック春季大会・球技大会」が全国大会の選手選考会を兼ねており、参加する多くの選手が全国大会出場を目指して、競技力を向上すべく日々の練習に励んでいます。現在、全

図2 埼玉県における精神障害者スポーツの全体像 (埼玉県立精神保健福祉センター 企画広報担当 作成)



国大会において正式採用されている精神障害者の競技種目は、バレーボールと卓球です。全国大会の種目には採用されていないフットサルにおいても、競技団体の有志により全国規模の大会が開催されるなど、精神障害者スポーツにも競技スポーツの普及が進んでいます。

全国大会は、スポーツの楽しさの体験と、社会参加の推進を目的に、身体・知的・精神の各障害種別の選手が一堂に会する全国規模の祭典です。そのため、埼玉県ではまだ全国大会に参加したことのない選手を対象に「初参加枠」を設けることで、競技性と社会参加の促進の両面を大切にしつつ、障害を抱えるより多くの方々が、スポーツに

親しめるよう工夫しています。

このように、県内における精神障害者スポーツは、リハビリテーション・レクリエーション志向の参加者にとっては身近な地域活動や健康づくりの機会として、また競技志向の選手にとっては全国大会出場を目指す取組の一つとして、さまざまな役割を担うとともに社会参加や自己実現につながる場となっています。こうした取組を実現するために、埼玉県スポーツ振興課、(一社)埼玉県障害者スポーツ協会、その他団体やたくさんの有志の方々が協働しています。

3 各関係機関、支援者からの活動レポート

(1) 埼玉県障害者スポーツ協会について

一般社団法人 埼玉県障害者スポーツ協会

当協会は、平成16年に埼玉県で開催された全国障害者スポーツ大会(以下、「全国大会」)を契機として同年12月に設立されました。障がいの

有無にかかわらず、すべての県民がスポーツを通じて交流し相互理解を深めることで、共生社会の実現を目指すとともに、障がいのある人が生涯に

わたり主体的かつ継続的にスポーツへ参加できる環境づくり、パラスポーツの普及・振興、健康増進、社会参加の促進及び競技力向上に取り組んでいます。正会員として、県内の障がい者のスポーツ競技団体13団体、県内の障がい者団体等7団体が加盟し、共に活動・運営を行っています。

当協会は、スポーツを通じて障がい者の体力の維持、増進、及び心身のリフレッシュを図ること等を目的として開催される、彩の国ふれあいピック春季大会及び彩の国ふれあいピック球技大会（以下、「春季大会」、「球技大会」）の事務局としても活動しています。春季大会及び球技大会は、全国大会に参加する埼玉県・さいたま市代表選手候補者の選考を兼ねています。選考規程を基に、選考会の記録優良者の中から競技や種目の特性、社会参加の観点を踏まえた未経験者への配慮を行い、代表選手候補者を選考します。

個人競技の予選会を兼ねた春季大会は、毎年2月中旬から3月上旬にかけて参加者を募集し、4月から5月に大会を開催しています。団体競技は、球技大会参加者から代表チームを結成し、全国を6ブロックに分けた予選会で戦います。各ブロックで優勝した1チームのみが全国大会へ出場することができます。選考された候補選手は、大会説明会や強化練習会・合宿で競技力並びに団結力を

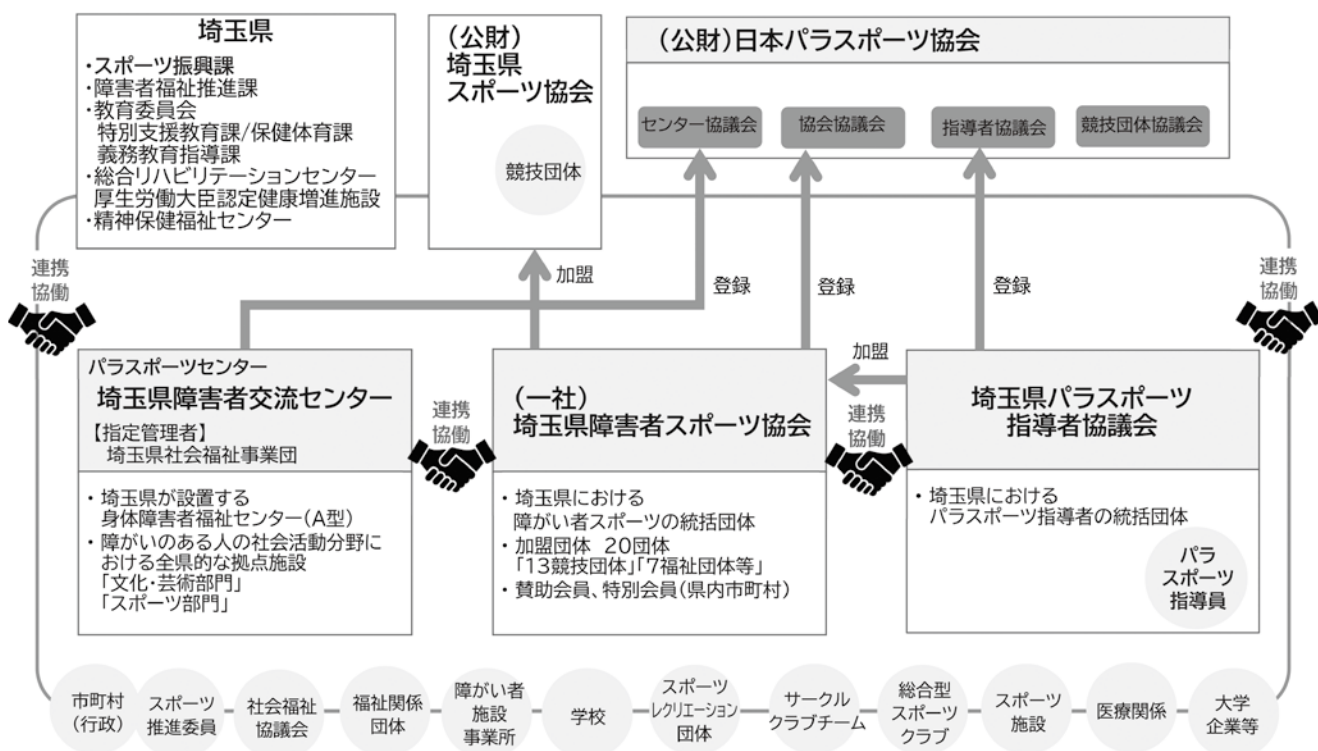
高め、結団式を経て代表選手としての自覚を新たに大会に臨んでいます。

春季大会及び球技大会の開催や全国障害者スポーツ大会埼玉県代表選手団の派遣にあたっては、（公社）埼玉県精神保健福祉協会及び多くの関係機関からご知見のある方を派遣いただき、選手が安心して参加できる環境づくりにご協力をいただいています。今後も関係機関・団体との連携を一層強化し、障がいのある人が日常的に身近な地域でスポーツを楽しむ環境の整備、誰もがスポーツを通じて活躍できる社会の実現に努めてまいります。



「わた SHIGA 輝く障スポ 2025」大会 開会式
埼玉県選抜代表選手団入場の様子

図3 関係機関



(2) 全国障害者スポーツ大会 埼玉県代表選手団に帯同して

埼玉県立精神保健福祉センター 田中花香理

当センターは（公社）埼玉県精神保健福祉協会への組織支援の一環として、全国障害者スポーツ大会（以下、「全国大会」）の帯同職員を派遣しています。令和7年10月25日～26日に開催された全国大会に、私は初めて帯同職員として参加し、卓球競技（精神障害の部）に出場する選手をサポートしました。

精神障害の選手が出場できる競技は、全14種目の内、卓球・バレーボールの2種目です。卓球は知的・身体・精神の3障害の代表選手が合同で練習に取り組み、全国大会期間中も同じ会場で競技に臨みます。そのため帯同する役員も3障害に対応できるよう、主に卓球の技術指導を行う指導者、手話通訳を必要とする選手の学校の教員、視覚障害のある選手への生活支援を行う役員等に加え、（公社）埼玉県精神保健福祉協会会員の精神科看護師と当センターの職員である私が精神分野の役員として参加しました。

競技の障害区分は分かれています、実際には複数の障害を持つ選手も参加しており、精神障害の代表選手でなくとも、精神障害に配慮した関わりを求められることが少なくありません。実際に今回の大会中も複数の障害を持つ選手が不調となり、精神科看護師が選手の対応にあたるとともに、私も動揺する他の選手や役員の心理的なサポートを行う場面がありました。精神分野の役員として参加することで、選手が不調の際の言動の理解や

その対応等について、周囲へ説明することができました。選手自身が試合で十分に実力を発揮するだけでなく、他の選手や役員の皆さんが安心して大会に参加する一助となれたのではないかと思います。

また、今回の大会参加は、他の役員、知的・身体障害の代表選手やご家族との交流を通じ、精神障害以外の障害について理解を深める機会ともなりました。卓球の本格的な練習や試合を見ることも初めてであったため、選手の皆さんの技術の高さや練習に費やしている時間、熱量を肌で感じる事ができ、私も頑張ろうと力をもらえる時間もありました。練習の空き時間には選手やご家族が積極的に声をかけてくださいました。その際、障害とそれに伴う不自由がありながらも「卓球を通して、再び楽しみや自分らしさを取り戻すことができた。」とお話いただき、スポーツが持つ力の大きさを感じました。

今回、初めて障害者スポーツに関わる機会に恵まれ、自分自身はスポーツが得意でなくても、サポーターとしてスポーツの楽しさを味わうことができることは、障害者スポーツの魅力の一つだと思いました。地域では様々な障害者スポーツが行われており、ボランティア等でかかわる機会があります。皆さんも興味がある競技からボランティア等で参加し、障害者スポーツの魅力を味わっていただければと思います。

(3) 埼玉ソーシャルフットボール協会について



(1) 埼玉ソーシャルフットボール協会の活動について

埼玉ソーシャルフットボール協会 副会長 前原佑紀

埼玉ソーシャルフットボール協会（以下、「SSFA」）は、精神障がい者フットボールの振興を通して、精神障がいはじめ様々な要因により社会的に孤立している方々の健康の増進、生活の質の向上、社会参加の促進を支援しています。

精神障がいがある方とない方のフットボールを通じた交流を進め、相互理解を深めていくことを通じて、ソーシャルインクルージョンの理念に基づいた地域共生社会の実現に寄与することを目的に平成20年に発足し、今日まで活動を続けてい

ます。フットサルというスポーツを通して、参加する方々が楽しみながらも自主的に協働できる機会を大切にしています。

SSFA 運営委員は、精神保健医療福祉に関わる機関・団体の職員や精神障がい者、当事者家族、フットボール指導者や地域のボランティア、サポーターで構成され、月に1回のミーティングを開いています。シーズン開催の埼玉県内リーグ戦を企画・開催し、関東大会、全国大会へ埼玉代表チームを送り出すことを目標にする他、地域での交流会を企画・開催しています。その他、同じく共生社会の実現を支持し、目指す団体と共にイベ

ントを共催しています。

令和8年2月より「埼玉ソーシャルフットボールの集い」が新たに発足し、協会に加盟するチームの選手や関係者といった当事者も主体的に関わる取り組みがスタートしました。SSFA 運営委員会とは別の機会を設け、月に1回のミーティング

を重ねながら参加者全員で意見を出し合い、イベントの企画・運営を行っています。選手自身が単なる参加にとどまらず、活動作りに関わることで、より充実したコミュニティの形成を目指しています。

令和7・8年度活動実績

開催日	主催等	内 容
令和7年4月29日(火)	運営協力	第18回スマイルサッカー大会 精神障がい者の部 会 場：レッズランド(さいたま市) 参加者：4チーム
5月25日(日)	主 催	ソーシャルフットボール関東大会埼玉予選会 会 場：サイデン化学アリーナ(さいたま市) 参加者：6チーム
10月11日(土)	運 営	ソーシャルフットボール関東大会2025 会 場：神奈川スポーツセンター(藤沢市) 参加者：8チーム
11月15日(土)	主 催	Sリーグ2025 会 場：入間市市民体育館(入間市) 参加者：5チーム
令和8年3月22日(日)	共 催	ソシオ所沢主催：インクルーシブフットサル交流会 会 場：サン・アビリティーズ所沢(所沢市)
3月28日(土)	主 催	フットサル交流会 会 場：ヴァーサス新座フットサルクラブ(新座市)
4月11日(土)	主 催	2026シーズン 埼玉ソーシャルフットボール協会 総会 会 場：与野本町公民館(さいたま市)



総会



Sリーグ2025



フットサル交流会



インクルーシブフットサル交流会

(2) 当事者選手として、そして運営委員として 埼玉ソーシャルフットボール協会 運営委員 野村忠明

精神障がいの当事者で選手をしながら、埼玉ソーシャルフットボール協会(以下、「SSFA」)の運営委員会に参加している野村忠明と申します。選手として、ソーシャルフットボールの大会に大変楽しく参加しています。一方で、SSFA 運営委員会委員として、10年近く参加しており、大会がどのように運営されているのか裏方の仕事を知ることができ、多くの学びとなっています。

ソーシャルフットボールの活動は、他の障がいがあるサッカーチームのみなさんとの活動も行うようになり、選手の社会参加や社会復帰の機会につながり、活躍の場が広がってきました。

僕は精神障がいに対するネガティブなイメージを変えることができると信じて活動を行っています。日々、精神障がいを抱えながら、真面目に生活している仲間が自分らしく生活できる居場所としてもソーシャルフットボールの活動は大切な役割を担っています。

（４）コートで輝いた、それぞれの一步 ―全国大会準優勝への軌跡―

バレーボール競技（精神障害の部） 埼玉県選抜代表チーム監督 河本次生

令和7年10月25日（土）～26日（日）の2日間、第24回全国障害者スポーツ大会「わたSHIGA 輝く障スポ 2025」バレーボール競技（精神障害の部）が滋賀県にて開催され、私は埼玉県選抜代表チームの監督として参加しました。全国から集まった選手団や関係者、観覧者により、会場は熱気と活気に満ちた交流と競技の場となりました。

前年度10月の県大会終了後、選抜された選手を中心に5月の関東大会（全国大会予選）に向けて練習を開始しました。これまでの選抜経験者も多く、練習への参加は比較的スムーズでしたが、体調の波などによりコンディションが安定しない選手も見られました。また、「今日は行こうか迷った」「周りが上手でついていけるか不安」といった声も聞かれました。そのため、選手一人ひとりと個別面接を行うなど、丁寧なフォローを心掛けてきました。

練習を重ねる中で、「ナイス！」「もう一本！」と自然に声を掛け合えるようになり、チームとしてのまとまりが生まれていきました。この変化の背景には、仲間を信頼し、自分の思いを表現できるようになったという精神面での成長がありました。また、サーブが入らず悔しさをにじませていた選手が、繰り返しの練習の中で成功体験を積み重ね、「自分にもできる」という自信を育んでいく姿も見られました。失敗を受け止め、次に向かおうとする姿勢が養われたことは、何よりの成果であったと感じています。

その積み重ねが実を結び、5月の関東大会では優勝を果たし、埼玉県は6年ぶりに全国大会への出場を決めました。10月の全国大会に向けては、酷暑を乗り越えながら技術面の強化を図り、練習を重ねる中でチームの結束はさらに強まっていきました。

全国大会には、身体障害・知的障害の選手団とともに新幹線で滋賀県へ向かい、5泊6日の長旅では他県の選手との交流も深めていました。試合当日、選手たちは緊張した面持ちでしたが、コートに立つと表情が一変し、仲間と声を掛け合いながら懸命にプレーしていました。試合前、「昨夜はあまり眠れなかった」と話していた選手が、試合では粘り強くボールをつなぎ続けていた姿が印

象的でした。長いラリーの末に得点が決まった瞬間、選手同士が笑顔で手をたたき合う姿には、これまでの努力のすべてが凝縮されていました。ミスをしてでも責めることなく「大丈夫、次いこう」と声を掛け合う姿からは、互いを信頼し、自分自身を受け入れることのできる関係性の深まりが感じられました。

その結果、チームは全国大会において準優勝（第2位）という成績を収めました。この成果以上に価値があったのは、選手一人ひとりが不安や緊張と向き合いながら自分の役割を果たし、最後まであきらめずに戦い抜いたことです。そこには確かな精神的成長が表れていました。

指導者として特に印象に残っているのは、大会終了後の選手たちの表情です。「楽しかった」「次は優勝したい」と笑顔で話す姿や、仲間や地元のボランティアと写真を撮り合う様子からは、競技をやり切った達成感と充実感があふれていました。その夜にはホテルで慰労会を開き、一人ひとりがこの1年を感慨深く振り返っていました。語られる言葉の中には、日々の積み重ねの中で育まれた成長が確かに感じられ、チームとしての経験が個々の成長につながっていることを実感しました。指導者である私自身も、選手一人ひとりに向き合う中で、障害の枠を超えた人と人との関わり大切さを改めて学び、自身の成長を感じる機会となりました。

精神障害者バレーボールは、単なる競技にとどまらず、人と人をつなぎ、その人の内にある力を引き出す大きな可能性を持っています。選手がいきいきと輝く姿は周囲に勇気と感動を与え、支える側にとっても学びと成長の機会となります。こうした積み重ねが、誰もが自分らしく生きることのできる社会の実現につながっていくことを強く実感した1年となりました。



バレーボール競技 決勝戦の様子 手前のチームが埼玉県選抜代表チーム